

2021年9月～10月に実施された噴火湾沿岸の環境調査結果のうち、森（9/6, 9/28）、八雲（9/23）、虻田（9/7, 9/21）、伊達（10/1）の水温・塩分の観測結果をとりまとめました（本情報は函館水産試験場のHPからもご覧頂けます <http://www.hro.or.jp/list/fisheries/research/hakodate/>）。

## 【水温・塩分の鉛直分布】

30m以浅の水温は14.3～22.0℃、塩分は32.43～33.94でした。昨年同時期の調査では津軽暖流水（水温6℃以上、塩分33.6以上）は見られませんでした（今年の噴火湾環境情報No.8参照）が、今年は深度15m以深を中心として津軽暖流水が分布しています。一方、15m以浅では、河川水の影響を受けた夏季噴火湾表層水の影響（低塩分、高水温）が残っており、全湾的に鉛直方向で2層化していました。

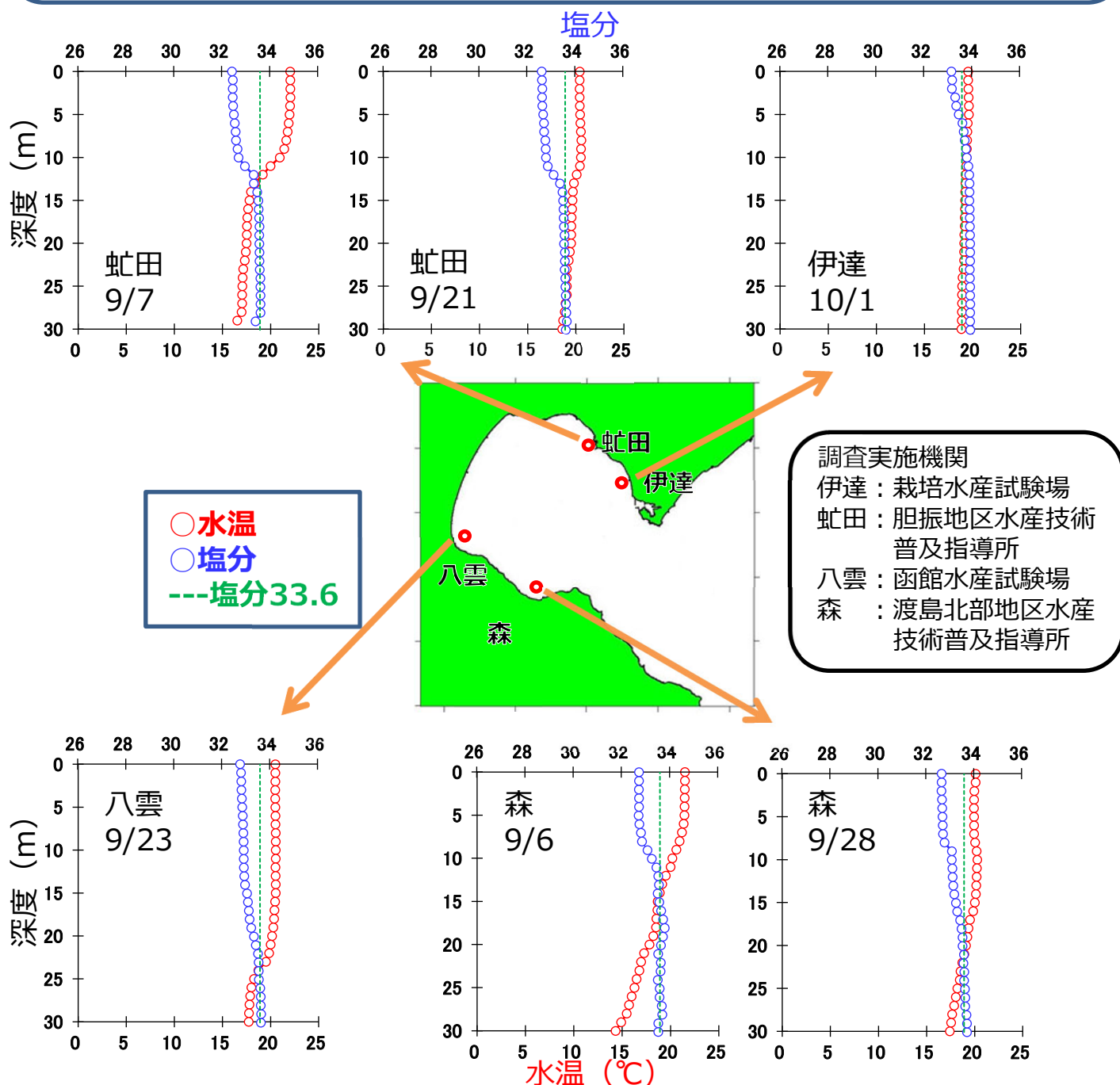


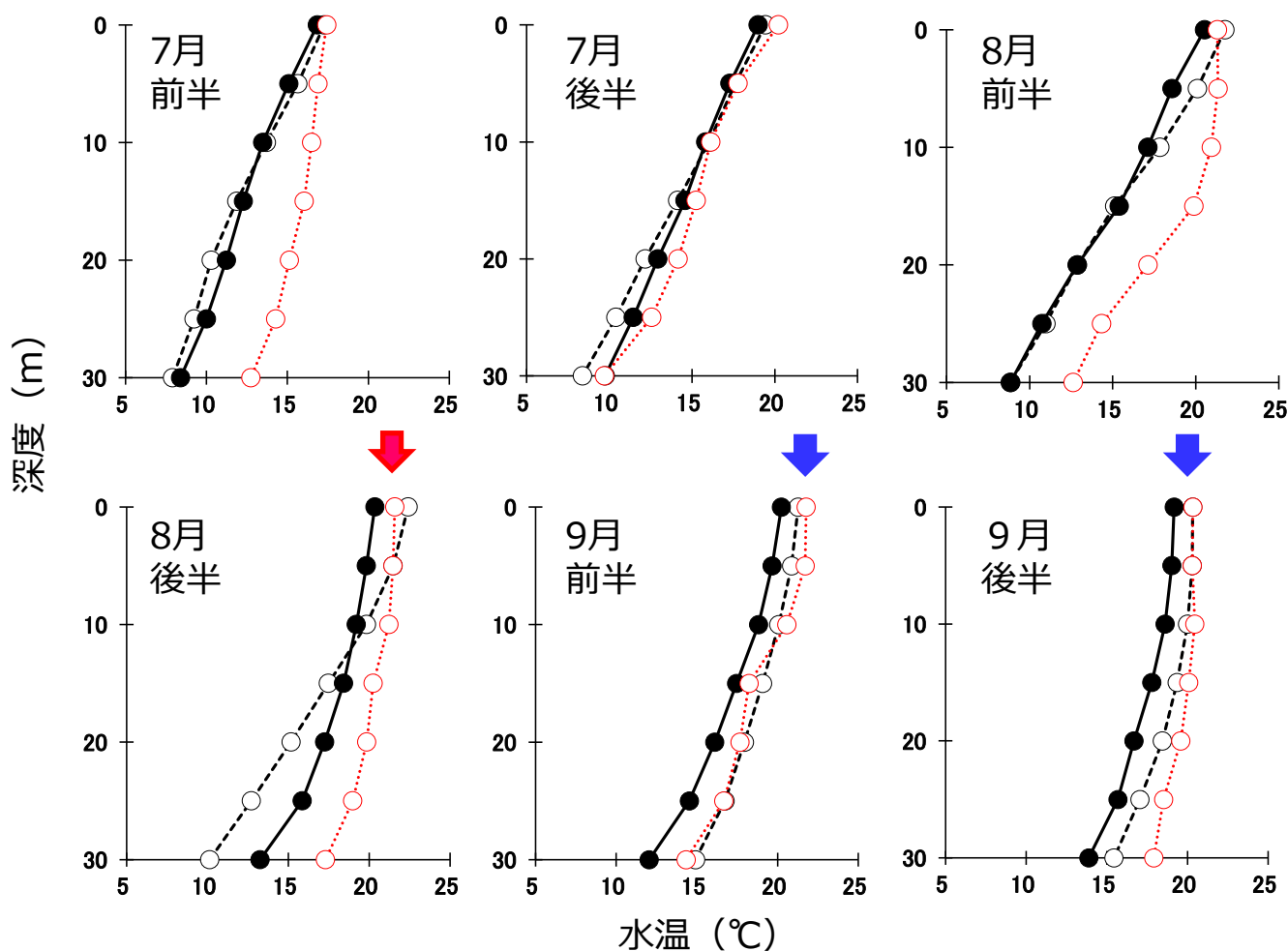
図1 噴火湾沿岸の水温・塩分の鉛直分布

※本調査の一部および情報配信は北海道はたて漁業振興協会からの委託研究により実施しています。

【養殖ホタテガイの「稚貝のでき」と夏季の環境条件】

夏季の水温の鉛直分布について、「稚貝のできが良かった年」、「稚貝のできが悪かった年」および「2021年」を比較した結果を図2に示します。稚貝のできが悪かった年では8月後半の水温の深度差が小さく、成層が弱い条件となっています。また、9月は全層の水温が低い傾向があります。今年（2021年）の8月後半は水温の深度差が小さく、成層の強弱という点では「稚貝のできが悪かった年」と似た特徴が見られました（赤矢印）。

一方、9月の水温は全層的に高めで、この点では「稚貝のできが良かった年」と似ています（青矢印）。今年は「稚貝のできが良かった年」と「稚貝のできが悪かった年」の特徴が混在していると言えます。本分散が終わっていない地区では、引き続き、稚貝の状態には十分に注意を払い、作業を進めてください。



- 稚貝のできが良かった年（成育良好年：翌3月の正常貝率80%以上）
- 稚貝のできが悪かった年（成育不良年：翌3月の正常貝率80%未満）
- 2021

図2 噴火湾沿岸の夏季の水温鉛直分布

2000年～2020年の虻田，八雲，森地区の1～2回/月の観測結果を各年各月の前後半の深度別で集計した上で、稚貝のできが良かった年，悪かった年の平均値を示しています。なお、2021年の8月後半の虻田が欠測となったことから、代替として伊達（8/30）と静狩（9/1）の観測結果を用いています。